

読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチ & デザインセンター
研究員 木村 和彦



『これからの「社会の変え方」を、探しにいこう。』

—スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー ベストセレクション 10—

●著者名 一般社団法人ソーシャル・インベストメント・パートナーズ(編集) 出版社 英治出版株式会社 価格 2,700円+税

近年、ニュースや新聞紙上等で「CSR (企業の社会的責任)」、「SDGs (持続可能な開発目標)」、「ESG (環境、社会、ガバナンス)」といった言葉が頻繁に聞かれるようになりました。細かなニュアンスの違いはあれ持続的な成長を遂げるだけでなく、社会的課題を解決することが求められる時代となっています。

このような時代を背景に、本書では「気候変動、環境汚染、食糧や水の確保、貧困、人権等といった社会のニーズと課題に対してまったく新しい解決策を発明し、支援を得て、社会に実装するプロセス」が「ソーシャルイノベーション」であると定義し、現場にいる実践者や研究者が行って来たことからの知見をまとめた『スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー』という米国スタンフォード大学のビジネススクールから生まれた雑誌に掲載された論文10本が掲載されています。

論文タイトルは、「ソーシャルイノベーションの再発見」、「システムリーダーシップの夜明け」、「あなたのエンドゲームは何か?」、「規模の拡大を目指して」、「大きなインパクトの生み出し方」、「グローバル企業に広がるBコーポレーション」、「社会を動かすカーブカット効果」、「投資の可能性を拓く」、「デザイン思考×ソーシャルイノベーション」、「コレクティブ・インパクト」で、それぞれ独立したものですので、タイトルを見て興味のあるものから読んでいくことが可能です。

通常のビジネス発想では、採算性が第一

義的なものとされますが、本書で取り上げられている「ソーシャルイノベーション」においては、社会的課題を解決することが第一義とされていることから、本書を読むことで異なった立場からの社会的課題やビジネスの見方を学ぶことができますでしょう。

また、ビジネスと社会的課題解決は対立するものではなく、「ソーシャルイノベーション」がビジネスとして成り立つ可能性があることも実例を以って知ることができます。「投資の可能性を拓く」では、営利目的型(営利事業として成立する)、低利益許容型(収支が若干プラス~プラスマイナスゼロ)、助成金型(他のセクションからの金銭的サポートが必要)というように「ソーシャルイノベーション」を分類して投資を行っている組織(オミディア・ネットワーク)について述べられています。「SDGs」等に取り組む中、同様の考え方を採用することで、新たなビジネスチャンスの発掘につながる可能性も高めることができるのではないのでしょうか。

【著者略歴】

・ジェームズ・A・フィルズ・ジュニア(スタンフォード大学経営大学院センター・フォー・ソーシャルイノベーション(CSI)理事、社会起業家、非営利リーダー、助成団体向けのエグゼクティブ・プログラムを監修。著書に『非営利組織におけるミッションと戦略の統合』(未訳)、その他にクリス・ダイグルマイヤー、デイル・T・ミラー等。